

教 育 研 究 業 績 書		
		2023年5月1日
		氏名 池内 彰子 印
研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
看護学	精神看護学 臨床看護学 高齢看護学 地域看護学	
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事項	年月日	概 要
1 教育方法の実践例 1) 看護系大学院での教育 (1) 常磐大学大学院 看護学研究科 ①大学院教育導入論（1単位選択科目）	令和4年度～	高等教育に関して定めた法律、文部科学省が発信する通知やガイドライン、中央教育審議会の答申等を教材に、大学院教育とは何か、国や社会は大学院修了者に何を求めているか、また看護系の修士レベルの教育統計に関する国際比較から、我が国、本県の大学院教育の現状について教授した。さらに、本研究科教育課程の特徴を理解したうえで、大学院生がどのように学修すべきかを自ら考え、大学院での主体的学修生活を自らデザインできるように指導した
②看護倫理とコンサルテーション論 (2単位専門看護師課程必修科目)	令和4年度～	高度実践看護師が行う倫理調整の基盤として必要な知識や諸概念、看護実践における様々な倫理的課題を理論を用いて分析し、看護現場における倫理的な問題・葛藤について関係者間の調整を行い、解決するためのアプローチ法を教授し、また、高度実践看護師に必要なコンサルテーションの基本的概念および実践モデル、コンサルテーションの類型とコンサルタントの役割、そしてコンサルテーションの技法について教授した
③精神専門看護学特論 I (2単位専門看護師課程必修科目)	令和5年度～	国内外の精神保健医療福祉の法制度、施策の歴史の変遷、認知症に関する保健・医療・福祉、およびリエゾン精神医療の歴史の変遷、また、現在の地域精神医療福祉施策と、その施策における具体的な支援内容、および地域移行支援に関わる精神看護専門看護師の活動の実際について教授した
(2) 茨城キリスト教大学大学院 看護学研究科 実践看護学分野 精神看護学領域 ①精神看護コンサルテーション特論（2単位必修科目）	平成26年度～ 29年度	精神看護学の実践におけるコンサルテーション能力の向上を目指して、コンサルテーションに必要な、対象をアセスメントする能力として、発達理論に基づいたアセスメントについて、エリクソン、ピアジェ等の成長発達理論について事例を提示して教授した。また、コンサルテーション能力に必要なコミュニケーションスキルとして、対人関係論を基盤とした治療的コミュニケーションスキルをロールプレイを取り入れ、実践的に教授した。さらに、医療チームにおける多職種連携、職種間調整における看護師の役割と機能について、国内外の実践事例を通して教授した

<p>②精神看護学演習（2単位必修科目科目）</p>	<p>平成26年度～ 29年度</p>	<p>精神機能の評価方法として、エゴグラムによる査定、精神健康度の査定（MHA）、精神状態の査定（MSE）、機能の船体的評価尺度（GAF）、リハビリテーション行動評価尺度（Rehab）、認知機能の評価、うつ尺度を用いたアセスメントについて事例を通して教授した。また、精神科治療技法として、支持的精神療法、集団精神療法、認知行動療法、SST、心理教育について基本となる理論から看護への実践的な活用法について、事例を用いて教授した。さらに、学生の研究テーマに則した精神看護学に関するトピックや、研究手法について国内外の文献を用いて、学生がプレゼンテーションした内容をスーパーバイズしながら指導した</p>
<p>③精神看護学特別研究（8単位必修科目）</p>	<p>平成26年度～ 29年度</p>	<p>研究指導補助教員として5名の学生を指導した。学生がとらえた精神看護学に関するテーマの研究について、研究のプロセスにそってゼミ形式、または個別指導により指導した。特に文献検索の指導、文献検討での論文クリティーク、研究方法におけるデータ収集方法や分析方法の検討、結果の示し方、考察に関するディスカッションと論文作成の指導に関わった 指導した修士論文テーマ ①「精神科看護師の自律性と職場環境との関連」 ②「救急外来および救命病棟の看護師が繰り返し自殺を行う患者を救命する時に抱く困難さ」 ③「看護師養成所に継続して就業している中堅期以上の看護教員の心理的揺らぎの構造」 ④「ICUの看護師が行っている患者へのメンタルケアの認識と実際」 ⑤「ターミナルケアに携わる新人看護師がバーンアウトに陥らないための関わり</p>
<p>2) 看護系大学での教育</p>		
<p>(1) 常磐大学看護学部看護学科</p>		
<p>①精神看護援助（2単位必修科目）</p>	<p>令和2年度～</p>	<p>精神看護援助（科目責任者）で、精神疾患のある患者の事例を用いて、セルフケア理論の枠組みを用いたアセスメントの方法、精神力動論に基づいた自我機能のアセスメント、対人関係に関するアセスメントと、地域生活に向けた、セルフケアの拡大、リカバリーの獲得を目指した看護計画立案、実施・評価の視点について学生とのディスカッションを通し、具体的に教授した。 回復過程に応じた援助として、「急性期の妄想・幻聴を訴える統合失調症患者」、また「回復期の活動意欲の低下している統合失調症患者」への関わり方をテーマに、TBLに基づいたシミュレーションを用いた教育方法を行った。 精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について教授した。また、当事者と共に創る授業として、地域で生活をしている統合失調症の当事者をゲストスピーカーとして招き、体験に基づいた講和を受け、ディスカッションを行った。 家族と共に創る授業として、精神疾患療養者の家族をゲストスピーカーとして招き、体験に基づいた講和を受け、ディスカッションを行った。 精神科における倫理について、事例を提示し、その事例における倫理的な課題を倫理原則に照らして考察させ、その状況において患者にとつての最善の看護とは何かを考察し倫理的課題の検討シートに記載し、グループディスカッションした。このプロセスを通して、学生の倫理的感受性を養い、看護の臨床場面での倫理的判断の思考プロセスについて教授した BPSDが著明に見られている認知症の患者への援助方法として、コンフォート理論を基に事例から考察させ、認知症患者の穏やかさを促進するための非薬物療法としてアクティビティケアについて、シミュレーションを用いて教授した</p>

②精神看護学実習（2単位必修科目）	令和2年度～	精神看護学実習（科目責任者）で精神科病院での精神疾患患者への援助と、地域生活での精神疾患療養者の支援について、臨地において、学生のリフレクションを促しながら指導した。また、精神科における倫理的課題のカンファレンスを毎回行い、学生が捉えた倫理的に気になった状況を、倫理原則に基づきながら、対象にとって最善な倫理的判断ができるように多面的な方向から考えを導き、学生の倫理的感受性に働きかけた。 学内実習では、受け持ち患者を想定し、実際の学生の実習計画に則して、シミュレーションの手法を用いて患者への援助について具体的な実践がイメージできるような教育を行った
③精神疾患とその治療（2単位選択科目）	平成30年度～令和元年度	精神の障害の捉え方についてICFモデルを用いて教授し、精神疾患の代表疾患である統合失調症、うつ病、認知症、依存症、パーソナリティ障害、発達障害について、各疾患の病態と症状、DSM-5、ICD-11等の診断基準と精神症状の評価方法方法、治療方法、およびそれらの疾患をもつ人への関わり方の基本について、事例の提示や動画等視聴覚教材を用いて教授した
④看護学概論（2単位必修科目）	平成30年度～令和2年度	精神看護学に関する概論として、精神障害のとらえ方について、ICFモデルを用いて、事例を提示しながら教授した。また、精神医療・看護・福祉に関する国内外の歴史を概観し、精神看護学の基盤となるリカバリー、エンパワメント、ストレングス等の概念について、事例をもとに教授した。さらに、入院生活、地域生活を通じた精神医療・保健・福祉に関わる法制度について、事例を示して理解しやすいように教授した
⑤生涯発達における援助技術（1単位必修科目）	令和2年度	支持的面接技法と治療的コミュニケーションスキルについて、「不安のある患者とのコミュニケーション」の事例を用いてTBLに基づいたシミュレーションの教育方法で指導した。また、学生にプロセスレコードを記載させ、それを基にグループディスカッションを行い、自分のコミュニケーションを振り返り、状況に応じた傾聴、共感、受容などの精神疾患患者に対する支持的面接技法、治療的コミュニケーション技法について具体的に教授した
⑥情報と看護展開Ⅱ（2単位必修科目）	令和元年度～令和2年度	限定された場面での状況判断、臨床判断能力を促進するために、精神看護学領域からの課題として、抑うつ症状のある更年期の女性の事例を用いてPBLによる教育方法で教授した。事例について、発達段階および自我状態からのアセスメント、症状のアセスメントを行い、症状に対する看護介入計画立案、評価の視点について、学生のディスカッションを導きながら指導した。また、学生が選んだテーマについてディベートを実践し、学生が協同して論理的な思考を深められるように指導した
⑦情報と看護展開Ⅲ（2単位必修科目）	令和2年度	地域生活における場面での状況判断、臨床判断能力を促進するために、地域看護や国際看護を課題とした事例を用いて、PBLによる教育方法で教授した。事例について、発達段階からのアセスメント、症状のアセスメントを行い、症状に対する看護介入計画立案、評価の視点について、学生のディスカッションを導きながら指導した

⑧看護展開導入演習（1単位必修科目）	令和2年度	領域別実習前の3年次生の看護実践能力を養うことを目的に、「不安のある患者とのコミュニケーション」というテーマでシミュレーション演習を行った。精神看護援助で学修した治療的コミュニケーションスキル、および支持的面接技法が実践の中でどのように効果的に活用できるかを、PBLを用いて教授し、看護実践能力の評価としてOSCEを実施した
⑨基礎看護学実習Ⅰ（1単位必修科目）	平成30年度～令和2年度	1年次生が入学直後に医療施設での看護師の実践を見学し、看護師の役割と機能について学修する実習において9～10名の学生を担当し、総合病院で実習指導を行った。実習後のまとめはゼミ形式で行い、疾患をもつ対象者にはどのような支援が必要になるのか、看護の役割と機能は何か、学生がディスカッションの中で自ら気づけるように導き、今後の学修への動機付けを行った
（2）茨城キリスト教大学看護学部看護学科		
①精神保健（1単位必修科目）	平成23年度～29年度	成人期、老年期の精神保健として、エリクソンの発達理論に則した発達課題と発達危機について、事例を用いて教授した。また、学生に関心のある新聞の切り抜きを持参させ、ディスカッションを通し、現在の社会における人間の精神的な問題について考察させた。また、薬物依存症者のセルフヘルプグループである茨城ダルクの施設長岩井喜代仁氏にとともに依存症、およびその看護に関する授業を行い、岩井喜代仁氏と学生とのディスカッションを通し学生に依存症患者の看護について考察させた。さらに、家族と精神保健について、家族システム論を教授した上で、家族と精神保健の関係について教授した
②精神看護学Ⅰ（2単位必修科目）	平成22年度～29年度	精神看護学Ⅰ（平成26年より科目責任者）では、精神看護学の概論として精神医療・福祉・看護の歴史と、精神看護学の基盤となる理論のリカバリー理論やストレングス理論、セルフケア理論について、事例をもとに教授した。また、精神力動に基づいた対人関係論について、具体的な事例を示して教授し、患者とのコミュニケーションに関する授業では、プロセスレコードを用いた自己の振り返りについて教授した。さらに、精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について教授した。また、当事者と共に創る授業として、地域で生活をしている統合失調症の当事者をゲストスピーカーとして招き、体験に基づいた講和を受け、ディスカッションを行った
③精神看護学Ⅱ（2単位必修科目）	平成22年度～29年度	精神看護学Ⅱ（平成26年より科目責任者）で、セルフケア理論に基づいた対象のアセスメント、看護上の問題の抽出、看護計画立案を事例を提示し、学生が主体的に学修するPBLの教育方法で指導した。また、精神科看護における倫理について教授し、その後の精神看護学実習（科目責任者）において、実習を通して経験した実際の精神科看護における倫理的課題をシートに記録させ、それについて臨地実習指導者とともにカンファレンスを行った。このことを通して、精神科看護における看護倫理の考え方、患者中心の看護について考察させ、学生の倫理観、看護観の育成を行った。さらに、精神障害者家族会のメンバーによる「当事者の家族と共に創る授業」として、当事者の家族の立場からの体験を話してもらい、当事者と家族と学生とのディスカッションを通し学生に看護師の役割について考察させた

④精神看護学実習（2単位必修科目）	平成22年度～29年度	精神看護学実習（平成23年より科目責任者）において、急性期・回復期慢性期の精神疾患を持つ受け持ち患者への看護過程の展開の指導と、実際のコミュニケーションの場面をプロセスレコードを用いて振り返り、カンファレンスにて学生のコミュニケーションの傾向について自己洞察を導いた。また、実習の中で学生がとらえた倫理的課題について、実習指導者とともにカンファレンスを行い、学生の倫理的判断に至る思考プロセスについて指導し、学生が倫理的感受性を養えるように導いた
⑤科学的思考基礎演習Ⅰ（1単位必修科目）	平成22年度～28年度  平成29年度	科学的思考基礎演習Ⅰでは、アカデミックスキルとして「レポートの書き方」について指導した。レポート作成のプロセスにそって具体例を示して指導し、その時の社会におけるトピックをテーマにレポートを書くことを指導し、レポート作成の段階ごとにそれを添削し返却するやり取りを繰り返し、文章作成能力向上にむけた指導を行った。  「対人コミュニケーションスキル」について、コミュニケーションの理論とアサーティブコミュニケーションスキルについて、学生が自分の経験した対人コミュニケーションの場面を振り返り、シミュレーションを取り入れた教育を行った
⑥科学的思考基礎演習Ⅲ（ヘルスアセスメント・アドバンス）（1単位必修科目）	平成25年度～29年度	科学的思考基礎演習Ⅲ（ヘルスアセスメントアドバンス）（平成27年度より科目責任者）で、心理社会的側面からのアセスメントについて、意識・認知・思考・記憶感情等のアセスメントを通して精神症状の評価、および把握の仕方、人格と行動のアセスメントとしてエゴグラムやYG性格テストを用いた分析方法について教授した。また、患者を心理社会的側面からどのようにアセスメントするのか、TBLに基づいたシミュレーション演習を行い、実践的に教授した
⑦科学的思考基礎演習Ⅵ（OSCE）（1単位必修科目）	平成23年度～29年度	科学的思考基礎演習Ⅵ（OSCE）（平成25年度より科目責任者）にて4年次生を対象とした卒業時OSCEとして、複数の専門領域からなる複合課題の作成を行った。さらに、課題のTBLに基づいたシミュレーションを用いた演習の計画・実施、OSCEの運営・評価を行い、学生の卒業に向けての臨床実践能力向上にむけた教育を行った
⑧科学的思考基礎演習Ⅶ（1単位必修科目）	平成23年度～29年度	科学的思考基礎演習Ⅶ（平成29年度より科目責任者）4年次生の看護実践力における知識を強化する目的で、国家試験出題基準から精神看護学に関する項目について講義し、国家試験対策としての状況設定問題を作問し、試験を行い、その試験の解説として精神看護学に関する実践に則した知識を教授した
⑨研究方法論（1単位必修科目）	平成23年度～29年度	研究プロセスにおける、文献検索の方法、および質的研究方法について講義した。文献検索では、学生が実際にデータベースにアクセスし、キーワード検索を実施する演習を行った。質的研究方法では、質的研究の代表的な手法である、質的帰納的研究方法、グラウンデッドセオリアプローチ、内容分析等について、実際の質的な手法を用いた論文を提示しながら、具体的な方法を講義した
⑩研究方法論演習（2単位必修科目）	平成22年度～29年度	各年で7～8名美学生を担当し、それぞれの学生の精神看護学に関する研究テーマに則した文献のクリティーク、研究計画書作成、研究対象者への依頼、データ収集、データ分析、論文作成、プレゼンテーションのスライド作成、プレゼンテーションの方法等を、通年でゼミ形式、または個別指導で教授した

⑪在宅看護論（2単位必修科目）	平成23年度～27年度	在宅看護論における精神疾患療養者への訪問看護、および認知症療養者への訪問看護のコマを担当した。包括型地域生活支援プログラム（ACT）やアウトリーチ支援に関する概要と、訪問看護に関わる法制度や精神疾患療養者や認知症療養者が必要とする訪問看護サービスについて、具体的な事例を示しながら教授した
⑫代替療法と看護（1単位選択科目）	平成23年度～29年度	非薬物的な治療法として、がん患者や慢性疾患患者の疼痛緩和やストレス対処、または精神疾患患者に対するリラクゼーション法、およびリフレクシュ法としてのタッチ療法、アロマオイルを用いたマッサージ法、呼吸法、瞑想法等が看護にどのように応用できるのか、基本となる理論と具体的な実践方法について、ロールプレイを取り入れて実践的に教授した
⑬早期看護体験実習（1単位必修科目）	平成22年度～29年度	1年次生が入学直後にさまざまな看護実践の場における看護師の役割を見学し、看護の多様性について学修する実習において、精神科ディケアや認知症ディサービス等の実習施設において7～8人の学生を担当し指導した。また、実習後のまとめはゼミ形式で行い、精神機能や認知機能に障がいがある対象者にはどのような支援が必要になるのか、看護の役割は何か、学生がディスカッションの中で自ら気づけるように導いた
⑭総合実習（3単位必修科目）	平成21年度～29年度	領域別の実習を終えた4年次生の総仕上げとしての実習で7～8人の学生を担当した。学生が自ら設定した、精神看護学に関連するテーマについて、文献等で深め、実習計画書を作成するプロセスにそって指導した。また、実習では複数の患者を受け持ち、病棟カンファレンスへの参加や等を通し、看護実践力が身につくような状況設定を工夫し、指導した。実習後のまとめについては、ゼミ形式で指導し、精神看護学の専門性について考察させた
⑮大学基礎演習（1単位必修科目）	平成27年度～28年度	教養科目である大学基礎演習において、学部学科を横断し構成された学生18名～19名に対して、大学で学ぶ意味、大学での学び方、アカデミックスキルとして、クリティカルシンキング、文献検索の方法、情報リテラシー、論文の読み方、レポートの書き方などをアクティブラーニングを用いて教授した
3) 看護専門学校での教育		
(1) 茨城県立つくば看護専門学校		
①精神看護学Ⅰ（精神看護学概論）（2単位必修科目）	平成25年～平成29年	ストレス状況の患者への看護についてストレス・適応理論を具体的な事例に適用して教授した。またASDやPTSDによる心理反応と基本的なケアについて災害時の事例を用いて教授した。さらに、アディクションと依存症の患者への看護について、学生の身近な事例を用いて教授した。精神科リハビリテーションと看護については、精神科リハビリテーションの重要概念であるリカバリーやエンパワメント、レジリエンスについて理解しやすく事例に基づいて説明し、レクリエーション療法、集団精神療法、SST、認知行動療法、心理教育等の精神科技法について、ロールプレイを用いて教授した。さらに、精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について、具体的な事例に基づきながら教授した

<p>(2) 水戸看護福祉専門学校 ①精神看護学Ⅲ (2単位必修科目)</p> <p>(3) 日立メディカルセンター看護学校 ①精神看護学概論 (2単位必修科目)</p>	<p>令和2年度</p> <p>平成16年6月</p>	<p>統合失調症、双極性障害、認知症、発達障害、パーソナリティ障害、依存症などの精神疾患の病態、症状、治療の概要と、それらの疾患の患者のアセスメントの方法と看護の方向性について、事例を展開しながら講義した。また、治療的コミュニケーション技法について、臨床場面を設定したシミュレーションを用いて教授した</p> <p>さらに、精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について、具体的な事例に基づきながら教授した</p> <p>精神医療・看護の歴史と、法制度、精神看護学の基盤となるリカバリーやエンパワメントなどの概念について教授し、精神構造と自我機能について事例を提示しながら教授した。また、精神の発達における「人間と性」をテーマにアクティブラーニングを通して考察させ、ディベートを取り入れて論理的に整理しながら思考を深められるように指導した</p>
<p>2 作成した教科書, 教材</p> <p>1) 常磐大学看護学部看護学科において作成した教科書, 教材</p> <p>(1) 常磐大学看護学部看護学科の精神看護学実習における「実習要項、記録用紙」等の作成</p> <p>(2) 常磐大学看護学部看護学科の精神看護学実習における「実習指導要領」の作成</p> <p>(3) 常磐大学看護学部看護学科の精神看護学実習における「学内実習指導要領」の作成</p> <p>(4) 常磐大学看護学部看護学科「実習要項共通版」の作成</p> <p>(5) 常磐大学看護学部看護学科「卒業時の看護技術到達度および実習における確認表」の作成</p>	<p>令和2年度～令和5年度</p> <p>令和2年度～令和5年度</p> <p>令和3年1月</p> <p>平成30年度～令和4年度</p> <p>平成30年度～令和3年度</p>	<p>精神看護学実習 (科目責任者) の実習要項・実習評価表・実習記録用紙を作成した。記録用紙は、セルフケア理論をベースにアセスメントの枠組みを作成し、学生の程の思考プロセスが段階的に進むように工夫した。実習評価表には、実習の進行に応じた到達目標を設定し、ルーブリック評価表を作成した</p> <p>精神看護学実習 (科目責任者) の実習指導の方法についてまとめ、実習指導者が実習指導の際に、実習指導の目的・指導方法等が共有でき、手引きになるような指導要領を作成した</p> <p>精神看護学実習 (科目責任者) の学内実習での指導方法として、統合失調症の患者のセルフケア拡大への援助、幻聴や妄想等の精神症状に対するマネージメントに関するシミュレーション演習のシナリオと指導案、指導要領を作成した</p> <p>教務委員としての活動の中で、学生が履修するすべての実習に共通する基本的な内容、注意事項を網羅した実習要項を作成した。作成にあたっては、新型コロナウイルス感染症予防に関する事項、実習時のハラスメントに関する報告・対応、インシデント・アクシデント報告・対応に関する事項について作成した</p> <p>学生が各科目の演習、実習を通し、看護技術経験の積み重ねと到達度を確認し、臨地実習指導者や教員と共有できることを目的とした、「卒業時の看護技術到達度および実習における確認表」を作成した。作成に際して、学生が卒業時に獲得すべき看護実践能力について、最新の文献や資料等を用いて検討した</p>

<p>2) 茨城キリスト教大学看護学部看護学科において作成した教科書, 教材</p> <p>(1) 茨城キリスト教大学看護学部看護学科精神看護学実習における「実習要綱」等の作成</p> <p>(2) 茨城キリスト教大学看護学部看護学科精神看護学実習における「実習指導要領」の作成</p> <p>(3) 「科学的思考基礎演習VI (OSCE)」における要綱等の作成</p>	<p>平成24年度～28年度</p> <p>平成24年度～28年度</p> <p>平成25年度～28年度</p>	<p>精神看護学実習 (科目責任者) の実習要綱・実習評価表・実習記録用紙を作成した。記録用紙は、セルフケア理論をベースにアセスメントの枠組みを作成し、学生の程の思考プロセスが段階的に進むように工夫した</p> <p>精神看護学実習 (科目責任者) の実習指導の方法についてまとめ、実習指導者が実習指導の際に、実習指導の目的・指導方法等が共有でき、手引きになるような指導要領を作成した</p> <p>科学的思考基礎演習VI (OSCE) (科目責任者) の科目の要綱、試験実施要綱、OSCE運営要綱、試験課題、シナリオ、評価表を作成した</p>
<p>3 教育上の能力に関する大学等の評価</p> <p>1) 常磐大学での評価</p> <p>(1) 「精神看護援助」における授業評価</p> <p>(2) 「精神看護学実習」における授業評価</p> <p>(3) 「生涯発達における援助技術」における授業評価</p> <p>(4) 「看護学概論」における授業評価</p> <p>(5) 「精神疾患とその治療」における授業評価</p>	<p>令和2年度～令和4年度</p> <p>令和2年度～令和4年度</p> <p>令和2年度～令和4年度</p> <p>平成30年度～令和2年度</p> <p>平成30年度～令和1年度</p>	<p>「精神看護援助」のリアクションペーパー、授業評価アンケートからは、理解しにくい精神症状のある患者の生活上の困難について理解でき、具体的な援助方法について考えられたという授業に対する評価を得た。 また、当事者と共に創る授業、家族と共に創る授業に対する授業評価アンケートでは、学生からは精神疾患療養者当事者と家族の生活のしにくさや、これからの希望など、実際の話しが聞けて理解が深まったという評価を得た</p> <p>「精神看護学実習」の授業評価アンケートによれば、受け持ち患者との関わりが難しい時に、どのように関われば良いのか、実際の患者との関わりの場面から示してくれたので理解しやすかった。また、実習で、患者とのやりとりについて、リフレクションシートをもとに、時間をかけて振り返りを促してくれたので、具体的にどのように関われば良いのか考えることができたという評価を得た</p> <p>「生涯発達における援助技術」のリアクションペーパー、および授業評価アンケートによれば、テーマとした「不安のある患者へのコミュニケーション」についてシミュレーションを用いて、治療的コミュニケーションを実践的に学修できたので、実習の際の受け持ち患者とのコミュニケーションに活用できる内容であったという評価を得た</p> <p>「看護学概論」の精神看護学に関するリアクションペーパー、および授業評価アンケートによれば、講義における説明や例示、資料の提示が理解しやすいという学生からの評価を得た。特に、精神障害のとらえ方について、精神医療・看護の歴史的な変遷から、人びとが精神障害をどのように捉えてきて、現在、自分たちはどうあるべきか、考えることができたとの評価を得た</p> <p>「精神疾患とその治療」のリアクションペーパー、および授業評価アンケートによれば、講義における説明や例示、資料の提示が理解しやすいという学生からの評価を得た。特に、説明だけでは理解しにくい精神症状については、具体的な事例や映像を用いて授業したことで、理解しやすかったとの評価を得た</p>



<p>2) 茨城キリスト教大学での評価</p> <p>(1) 「精神看護学Ⅰ」における授業評価</p> <p>(2) 「精神看護学Ⅱ」における授業評価</p>	<p>平成26年度</p> <p>平成27年度</p>	<p>精神看護学Ⅰ「依存症者の看護」「精神科リハビリテーション看護」講義後のリアクションペーパーによれば、説明のしかた、資料の提示が理解しやすいという学生からの評価を得た</p> <p>精神看護学Ⅱの看護過程の講義・演習後のリアクションペーパーによれば、看護過程に関する指導が理解しやすいという学生からの評価を得た</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p> <p>1) 競争的研究資金の獲得</p>		
<p>(1) 令和5(2023)年度科学研究費 (学術研究助成基金助成金(基盤C)助成)</p>	<p>令和5年4月1日</p>	<p>課題「軽度認知障害のワーキングメモリを活性化し実行機能を高める看護介入プログラムの開発」<u>分担者</u> 軽度認知障害を有している人を対象に、認知機能のワーキングメモリを活性化する介入を試み、その結果実行機能が促進され、日常生活の質が向上することを旨とする看護介入プログラムの効果検証を目的とした研究である。</p>
<p>(2) 令和2(2020)年度科学研究費 (学術研究助成基金助成金(若手研究)助成)</p>	<p>令和2年4月1日</p>	<p>課題「地域生活をしている統合失調症療養者のセルフケア能力促進のための心理教育の効果」<u>(代表者)</u> 地域で生活をしている統合失調症療養者のセルフケア能力の向上をめざした心理教育プログラムを作成し、その効果を検証することを研究目的とした。心理教育プログラムは、地域で生活をしている統合失調症療養者が、生活の中でどのようなことに困難を感じ、どのような知識を得たいと思っているのか、特に日常生活上の意思決定能力を始めとするセルフケア能力に着目し作成する。心理教育プログラムは、心理教育プログラムの構造化されたスタイルである「情報提供」および「話し合い」を基本として、最初に、自らの疾患に関する学習を通しその正しい理解を促進する。次に、体調を含め生活全般を自己管理する方法や、生活の中でおこる困難なことへの対処方法について、当事者同士で話し合うことを通し、統合失調症療養者のセルフケア能力がエンパワメントすることをねらいとする研究である</p>
<p>(3) 2023年度常磐大学課題研究(共同研究)</p>	<p>令和5年4月1日</p>	<p>課題「精神科看護師を対象とした「徳の倫理教育プログラム」の効果」<u>(代表者)</u> 精神科看護師に求められる「徳の倫理」のあり方について探求し、精神科看護師を対象とした「徳の倫理」に関する教育プログラムを作成し、その効果を検証することを目的とした研究である。</p>
<p>(4) 2018年度常磐大学課題研究(共同研究)助成</p>	<p>平成30年6月26日</p>	<p>研究課題「茨城県における在宅精神疾患療養者と家族のケアニーズと訪問看護サービスの実態」<u>(代表者)</u> 茨城県の精神科訪問看護サービスの現状とその課題を明確にし、課題解決に向けて今後の地域生活支援のあり方を検討することを目的とした。以下の3つの研究を実施した。 第1段階の研究(2018年度)：茨城県における精神科訪問看護の現状を、訪問看護事業所管理者への質問紙調査によって明らかにした 第2段階の研究(2019年度)：訪問看護師の精神科訪問看護への困難感・不安・達成感などの思いとそれに関連する要因を、質問紙調査によって明らかにした 第3段階の研究(2020年度)：在宅精神疾患療養者と家族の精神科訪問看護に対する満足度、要望について半構造化インタビューで明らかにした これらの研究成果は、茨城県看護協会の精神科訪問看護事業において公表し、また日本看護科学学会、日本精神保健看護学会等で発表した</p>

<p>(5) 2018年度常磐大学課題研究 (共同研究) 助成</p>	<p>平成30年6月26日</p>	<p>研究課題「慢性統合失調症の実行機能障害と手段的ADL(日常生活動作)との関連性の検討」(分担者) 慢性期統合失調症者の病態の特徴から日常生活行動における実行機能障害の特徴について、外来へ通院中の患者8名を対象にBADS(遂行機能障害症候群の行動評価)を用いて評価・検討した。実行機能障害の特徴として、プランニングと柔軟性の能力の低下が患者の日常生活行動に影響を与えていること、また実行機能障害は再発や再燃に影響する服薬アドヒアランスの低下に関連することが示唆され、慢性統合失調症者の認知機能の低下予防に関する支援プログラム作成の基盤となった</p>
<p>(6) 2016年度茨城キリスト教大学 学術研究センター・プロジェクト研究 自由課題研究(個人) 助成</p>	<p>平成28年4月1日</p>	<p>研究課題「精神科看護師の臨床判断能力・状況把握能力促進のための教育プログラム開発に向けた基礎的研究—精神科看護師の批判的思考能力と影響要因の検討—」(代表者) 精神科看護師の臨床判断能力・状況把握能力の促進を目指した教育プログラムを開発するために、精神科看護師の思考能力につながる批判的思考態度とその関連因子である臨床経験、倫理的感受性、コミュニケーションスキル、自己効力感について自記式質問紙にて調査した。この調査結果を基に、臨床判断能力につながる批判的思考態度を養うための教育プログラムを作成した。これらの研究成果は日本精神保健看護学会、日本看護科学学会等で発表した</p>
<p>(7) 2012年度茨城キリスト教大学研究 (共同研究) 助成</p>	<p>平成24年4月1日</p>	<p>研究課題「東日本大震災により看護学生が受けた心理的影響」(代表者) 東日本大震災時にA大学看護学部の学生が経験した被災の状況と、被災の経験による学生の心理的影響を明らかにし、必要なメンタルヘルスサポートについての示唆を得ることを目的に、改訂版出来事インパクト尺度等を用いた自記式質問紙調査を行い、その結果について日本看護科学学会にて発表し、同時に茨城キリスト教大学での被災後の学生支援に役立てた</p>
<p>(6) 持続可能社会に向けた地域の環境作り活動」教育研究助成</p>	<p>令和1年6月26日</p>	<p>課題「大学生を対象とした子どものグリーフプログラムのファシリテーター養成に関する活動」(代表者) 任意団体「グリーフサポートいばらき」が主催するグリーフプログラムにおいて、大学生が主体となり、大切な人を亡くした子どもへのグリーフサポートを実践するための学生ファシリテーターを養成することである。その活動を通し、学生が人間にとっての生と死または家族関係のあり方を洞察する契機とし、対人援助に必要な感性や、安心感を提供するための姿勢、コミュニケーションスキル、または共助の精神を養うことをねらいとした。ファシリテーター養成研修会への参加は、大学生38名で、全員が2日間の養成研修会に参加し、今後は子どものグリーフサポートプログラムのファシリテーターとして活動する</p>
<p>2) 大学における活動 (1) 常磐大学での活動 ①常磐大学看護学部FDにおける教育実践報告</p>	<p>平成32年7月23日</p>	<p>看護学部看護学科の教員を対象に、効果的な実習指導方法として、精神看護学実習指導における、学生のリフレクションを通して実習場を教材化していくプロセスについて、自己の実践例を基に、教材化モデル、リフレクションモデルを用いて報告した</p>

②常磐大学看護学部実習連絡協議会開催	平成30年度～ 令和4年度	常磐大学教務委員として常磐大学看護学部実習連絡協議会開催の責任者を行った。すべての実習施設から実習指導者を招き、年度ごとの実習の総括と次年度実習の計画、および臨床実習指導者と教員による意見交換会を、テーマ「実習指導における臨床実習指導者と教員の効果的な連携」について行い、意見交換会のファシリテーターを行った
③常磐大学看護学部カリキュラム改訂ワーキング	令和2年度	2022年度からの新しい教育カリキュラムについて検討するワーキンググループで、現行カリキュラムの運営状況を総括し、課題をまとめた。また、文科省によって示された新カリキュラムの考え方を受け、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーを再検討し、各講義科目と実習科目について再検討し、主に講義科目の見直しと新設科目の検討をリーダーとして担った
④常磐大学看護学部OSCE実施ワーキング	平成30年度～ 令和2年度	看護展開導入演習（3年次必修科目）、看護展開統合演習（4年次必修）で実施するOSCE実施に関するワーキングにおいて、文科省により示された看護学士課程教育におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標を基に、本学部の教育課程を分析し、OSCEを通して測定可能である学生の看護実践能力について明確にした。その上で、OSCE課題の作成、評価表作成、評価入力システムの作成、運営全般の統括を行った
⑤常磐大学入学者選抜制度改革、入学者に関する分析	平成30年度～ 令和2年度	常磐大学入試委員として、常磐大学の入学者選抜制度改革に関わり、入学者選抜方法の改正を行った。また、看護学部の入学者について、入学の動機、高等学校からの内申書、入学者選抜方法別の入学者選抜試験の結果、入学後のGPA等を分析することを通し、入学者の傾向を把握し、入学者受け入れ計画のためのデータを取りまとめ、分析した
⑥2022年度常磐大学大学院看護学研究科履修案内作成	令和4年度～ 令和5年度	常磐大学大学院看護学研究科教務委員長として2022年度、および2023年度の履修案内の作成に関わった。主に看護学研究科の概要、教育課程、履修要領、学生生活に関する内容について執筆した。
⑦常磐大学課題研究助成報告書	令和4年3月	常磐看護学研究雑誌第4巻に、2018年～2020年の常磐大学課題研究助成を得て実施した研究課題「茨城県における在宅精神疾患療養者と家族のケアニーズと訪問看護サービスの実態」について、第1段階～第3段階の研究の概要を報告書としてまとめた。
⑧常磐大学課題研究助成報告書	令和4年3月	常磐看護学研究雑誌第4巻に、2018年～2020年の常磐大学課題研究助成を得て実施した研究課題「慢性統合失調症の実行機能障害と手段的ADL(日常生活動作)との関連性の検討」について、精神科外来へ通院中の慢性期統合失調症者8名を対象に実行機能評価Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome (BADS) を用い、基本情報との関連性について検討した研究の概要を報告書としてまとめた。
⑨常磐看護学研究雑誌第5巻発刊	令和5年3月	看護学部紀要編集委員長として常磐看護学研究雑誌第5巻の編集作業の責任者として発刊に関わった。
(2) 茨城キリスト教大学での活動		
①各年度の授業改善委員会活動報告集発行	平成21年度～ 27年度	授業改善委員会委員長として活動報告集作成をとりまとめた。平成26年度には授業評価アンケート実習版を作成し、27年よりすべての実習科目での授業評価アンケートの実施について運営した

<p>②茨城キリスト教大学看護学部実習連絡協議会における講演会 講師</p> <p>③茨城キリスト教大学看護学部紀要編集</p>	<p>平成27年4月23日</p> <p>平成29年度</p>	<p>茨城キリスト教大学実習連絡協議会において、各実習施設代表者、大学教員約60名を対象にテーマ「本学の卒業時OSCEの到達度から考える臨地実習のあり方」について、OSCEの実践からとらえた学生の看護実践能力の向上のための、臨地実習における教育の工夫について講演した</p> <p>茨城キリスト教大学看護学部紀要 第9巻 第1号について、編集委員長として、投稿論文募集、執筆者・査読者とのやり取り、論文校正、編集等の作業を行い、編集後記をまとめた</p>
<p>3) 看護系学会における活動</p> <p>(1) 公益社団法人日本看護科学学会</p>	<p>令和5年度～</p>	<p>公益社団法人日本看護科学学会代議員として選出され、学会運営、学術雑誌の査読者、学術集会の準備等に関わっている</p>
<p>4) 地域における活動</p> <p>(1) 茨城キリスト教大学 2011年度春期開講 県民大学「認知症の理解と予防」 講師</p> <p>(2) 茨城キリスト教大学 2012年度春期開講 県民大学「認知症の理解と予防」 講師</p> <p>(3) 茨城キリスト教大学 2013年度春期開講 県民大学「認知症の家族と暮らす」 講師</p> <p>(4) 茨城キリスト教大学 2014年度春期開講 県民大学「認知症の家族と暮らす」 講師</p> <p>(5) 茨城キリスト教大学2105年度春期開講 県民大学「こころの健康を保つ～認知症・うつ病の理解と予防～」 講師</p> <p>(6) 茨城キリスト教大学2106年度春期開講 県民大学「こころの健康を保つ～認知症・うつ病の理解と予防～」 講師</p> <p>(7) 日立市認知症ライフパートナー検定試験 準備講座 講師</p>	<p>平成23年6月</p> <p>平成24年6月</p> <p>平成25年6月</p> <p>平成26年6月</p> <p>平成27年6月</p> <p>平成28年6月</p> <p>平成26年度～ 令和4年度</p>	<p>アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などの認知症に関する病態・症状・ケアの方法や、認知症にならないための生活上の工夫、認知症に関する法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などの認知症に関する病態・症状・ケアの方法や、認知症にならないための生活上の工夫、認知症に関する法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などの認知症に関する病態・症状・家族としての関わり方・介護の方法や、認知症に関する法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などの認知症に関する病態・症状・家族としての関わり方・介護の方法や、認知症に関する法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>高齢者の健康問題として重要な認知症とのうつに関する病態・症状・ケアの方法や、認知症やうつにならないための生活上の工夫、または法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>高齢者の健康問題として重要な認知症とのうつに関する病態・症状・ケアの方法や、認知症やうつにならないための生活上の工夫、または法律制度について、一般市民の方が理解しやすい内容で講義した</p> <p>アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症、脳血管性認知症などの認知症の病態、症状、認知症の方とのコミュニケーション方法、アクティビティケア、認知症に関する法律・制度などを認知症ライフパートナー検定試験受験対策講座として講義し、受講生からは、認知症の病態、治療など難しい知識が、資料などを通して理解しやすく学べたと評価された</p>

(8) 家族による家族心理教育プログラム 講師	令和1年度～令和2年度	精神障害者の家族会である、ハートねっと日立市民の会の会員を対象に、家族が主体となっていく家族心理教育プログラムの講師として、統合失調症やうつ病などの精神疾患の病態や症状、治療や生活上の注意点、または精神障がい者の家族の心理や、精神障がい者を対象とした法制度、社会資源の活用方法などを、家族が理解しやすいようなパンフレットを作成し説明した。また、心理教育プログラム実施後は、家族がお互いに自分たちの経験を話し合う場として、そのファシリテーターを行った。
(9) 大切な人を亡くした子どものグリーフサポートプログラム 主催	令和1年度～令和3年度	常磐大学公認任意団体「グリーフサポートいばらき」の代表として、6名の子どもと保護者に対して、「大切な人を亡くした子どものグリーフサポートプログラム」を主催し、ファシリテーターとして、参加した子どもと保護者への心理的ケアに関わった。プログラム開催にあたって、2日間のグリーフサポートファシリテーターの研修を受け、子どものグリーフにおける心理過程や、その保護者の心理過程、プログラムの運営、ファシリテーターとして子どもに関わるコミュニケーション・スキル、保護者の分かち合いの会でのファシリテーション・スキル等を学んだ
(10) 常磐大学2021年度オープンカレッジ講師	令和3年7月	常磐大学地域連携センター主催のオープンカレッジのテーマ「あなたの健康寿命を延ばしましょう」の講師として、第2回「こころの健康の保ち方」第3回「認知症を理解する」を担当した。地域住民約30名に対し、高齢者の心の健康の保ち方や認知症に関する最新知見、認知症の人とのかかわり方について、視聴覚資料を用いて分かりやすく説明をし、難解な内容をかみ砕いて説明されたので理解しやすかったと評価を受けた。
5) 看護専門学校学生・看護職者への教育に関する活動		
(1) 水戸看護福祉専門学校 非常勤講師	令和1年度～令和5年度	看護学科2年次生を対象に「精神看護学Ⅲ」 統合失調症、双極性障害、認知症、発達障害、パーソナリティ障害、依存症などの精神疾患の病態、症状、治療の概要と、それらの疾患の患者のアセスメントの方法と看護の方向性について、事例を展開しながら講義した。また、治療的コミュニケーション技法について、臨床場面を設定したシミュレーションを用いて教授した さらに、精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について、具体的な事例に基づきながら教授した
(2) 茨城県立つくば看護専門学校 非常勤講師	平成25年～平成29年	精神看護学概論において、ストレス状況の患者への看護について、ストレス・適応理論を具体的な事例に適用して教授した。またASDやPTSDによる心理反応と基本的なケアについて災害時の事例を用いて教授した。さらに、アディクションと依存症の患者への看護について、学生の身近な事例を用いて教授した。精神科リハビリテーションと看護については、精神科リハビリテーションの重要概念であるリカバリーやエンパワメント、レジリエンスについて理解しやすく事例に基づいて説明し、レクリエーション療法、集団精神療法、SST、認知行動療法、心理教育等の精神科技法について、ロールプレイを用いて教授した。さらに、精神障がい者の地域生活支援について、基本となる概念や理論、および地域生活支援に必要な法制度について、具体的な事例に基づきながら教授した
(3) 日本精神科看護協会茨城県支部 看護研修会「精神科看護における倫理」 講師	平成28年10月	「精神科における倫理」について、精神科の臨床で起こり得る倫理的な課題を含んだ事象に関して、どのように考えていくべきなのか、倫理的な思考プロセス・倫理的判断について、実際の実習の中での事例をもとに講義した

(4) 茨城県精神科病院協会看護師長会研修会 「精神科における倫理について」 講師	平成25年4月	「精神科における倫理」について、精神科の臨床で起こり得る倫理的な課題を含んだ事象に関して、どのように倫理的に思考し判断していくのか、実際の実習の中での事例をもとに講義した
(5) 日立梅ヶ丘病院 医療・看護倫理研修 講師	平成27年12月～平成28年1月	院内研修として、病院職員を対象に「精神科医療における倫理」について、精神科の臨床で起こり得る倫理的なジレンマや倫理原則など、基本的な考え方について講義した
(6) 茨城県准看護師教育研修会 講師	令和1年12月3日	茨城県内の准看護師看護学校の専任教員30名を対象に「准看護師教育に活かす精神看護学」のテーマで講演会を行った
(7) いわき市立総合磐城共立病院 看護ラダーレベル別研修 ストレスマネジメント研修 コーチング研修 講師	平成24年8月	院内研修として、入職3年～5年の看護師を対象に「ストレス対処」と「コーチング」について、ストレス・コーピング理論等の基本となる理論から実践まで、演習を取り入れ講義した
(8) いわき市立総合磐城共立病院 看護ラダーレベル I 研修 講師	平成26年～平成29年	院内研修として、入職1年目の看護師を対象に「自己理解と他者理解」「アサーティブコミュニケーション」について演習を取り入れ講義した
(9) 福島労災病院看護研究指導 講師	平成24年～平成27年	看護研究の基本的知識を講義と、各病棟で取り組んでいる看護研究について、研究計画書作成から論文作成、院内発表会での発表まで指導した
(10) 国家公務員共済組合連合会水戸水府病院 看護研究 講師	平成25年7月	看護研究の基本的知識を講義と、各病棟で取り組んでいる看護研究について、研究計画書作成の指導を行った。
(11) 国立病院機構茨城東病院看護研究 講師	平成25年8月	各病棟で取り組んでいる看護研究について、研究計画書作成の指導を行った
(12) 日立梅ヶ丘病院院内研究学会 講評	平成28年～令和3年	各病棟で取り組んだ看護研究発表の講評者として、発表された研究の講評、および看護研究に関する基本的な知識の講義を行った
(13) 日本精神科看護協会茨城県支部 看護研修会 「看護学実習の現場から精神科倫理を考える」 講師	令和3年9月	精神看護学実習で学生がとらえる倫理的な課題の内容と課題解決のためのカンファレンスからの学修を通して 学生が見ている現在の精神科看護の臨床の現場にある倫理的な問題と精神科看護のあり方について、精神科看護師100名を対象に講義を行った。
(14) 日本精神科看護協会茨城県支部 看護研修会 「精神科看護師による保護室の開放判断について」 講師	令和3年12月	精神科急性期病棟の保護室から患者を開放する際の判断として、看護師は何を重要視し、その視点は医師と比べてどこが違うのか、看護師が開放判断において専門性を発揮するためには何が必要となるのかについて精神科看護師100名を対象に講義した
6) 看護協会における活動		
(1) 看護協会茨城県支部臨床実習指導者講習会 「精神看護学実習指導について」講師	平成24年～令和2年	看護学実習指導の原理原則と実習における看護学生の心理、精神看護学実習における教材化の方法、具体的な指導方法・評価方法について、実際の実習指導の事例を用いて、ロールプレイを取り入れ実践的に講義した

(2) 茨城県看護協会精神科訪問看護基本療養費算定要件研修 講師	平成26年度～令和5年度	茨城県看護協会主催の精神科訪問看護基本療養費算定要件である研修として、精神疾患療養者のアセスメントに関して、事例を用いてBPSモデル、セルフケアモデル、ストレングスモデルに関するアセスメントと、MSEによる精神症状のアセスメント、GAFによる評価方法などの講義を行った		
(3) 茨城県看護協会精神科訪問看護研修会	平成28年～平成30年	茨城県看護協会主催の訪問看護研修会で、「精神症状のある在宅療養者への訪問看護」の講義を行った。統合失調症やうつ病、認知症、発達障害等、訪問看護の対象の疾患について説明し、コミュニケーションの取り方、精神症状のアセスメント、看護計画立案のポイント、看護介入の具体的方法について、事例を示しながら、理解しやすいように教授した		
5 その他				
1) 入学試験問題作成	平成29年度 平成27年度～28年度	茨城キリスト教大学院看護学研究科入学試験問題作成 茨城キリスト教大学推薦入学試験問題作成		
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項				
事項	年月日	概要		
1 資格, 免許				
1) 看護師免許	昭和60年5月2日	第527719号		
2) 厚生労働省認定看護教員	平成6年12月9日	厚生労働省認定看護教員養成講習会修了		
3) 介護支援専門員 第412号	平成13年3月22日	茨城県介護支援専門員養成研修会修了		
4) 薬物乱用対策研修修了者N0第48号	平成24年7月6日	薬物乱用対策研修会修了		
5) 日本精神看護技術協会社会生活技能訓練 (SST) 修了証	平成24年9月1日	日本精神科看護技術協会社会生活技能訓練 (SST) リーダー養成講習会修了		
6) 日本心理教育・家族教室ネットワーク標準版家族心理教育研修会修了証	平成30年12月2日	日本心理教育・家族教室ネットワーク主催の家族心理教育インストラクター養成研修会修了		
2 特許等				
研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項				
著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
(著書) 1. ナーシング・ポケットマニュアル 老年看護	共著	平成21年9月20日発行	医歯薬出版株式会社	第七章「認知症高齢者の看護」を認知症ケアの理念から、日常生活上のケア、権利擁護や制度について、具体的な例を挙げて著した 担当部分：pp. 170-188 執筆者：堀内ふき編 池内彰子 他7名

<p>(学術論文)</p> <p>1. ケア提供者による重度認知症高齢者の感情把握からケア提供までのアセスメント過程の分析 (修士論文)</p>	<p>単著</p>	<p>平成21年3月</p>	<p>茨城県立医療大学大学院 保健医療科学研究科 看護学専攻</p>	<p>重度認知症高齢者のケアを行っている看護師・介護福祉士はコミュニケーション能力が低下している重度認知症高齢者の感情をどのように把握しケアの提供につなげているのか、アセスメントの過程を探索した。 Ⅰ. 介護老人保健施設と特別養護老人ホームに勤務する看護師6名、介護福祉士5名にそれぞれフォーカスグループインタビューを行い、ケア提供者が重度認知症高齢者の感情を把握する視点として、【いつもの状態からの変化】などの4カテゴリーを抽出した。さらに、ケア提供者が重度認知症高齢者に実際にケアを行っている場面に参加観察し、どのように重度認知症高齢者と相互作用をしながらケア提供の必要性を判断しているのか分析した結果、【状況が変化しているか】などの4カテゴリーを抽出した。 Ⅱ. ケア提供者は重度認知症高齢者個別の「いつもの状態」を感情把握の基準とし、微細な観察をもとに、そこからの逸脱状態から感情を把握し必要なケアの判断をしていたことが明らかになった (総頁数72)</p>
<p>2. 精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識 —カンファレンス参加経験の有無に焦点をあてて— (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年2月発行</p>	<p>茨城キリスト教大学看護学部紀要 第2巻第1号 pp. 19-28</p>	<p>精神看護学実習中に行っている「倫理的課題検討カンファレンス」に対する看護スタッフの認識と、検討後の臨床への影響や効果を明らかにするために、実習病院の看護スタッフを対象に調査した結果、カンファレンスへの参加経験の有無にかかわらず、70%の看護スタッフがカンファレンスを「継続すべき」と回答し、約6割の看護スタッフがカンファレンスを「前向き」、「有意義」ととらえていた。さらに、カンファレンス参加経験者はカンファレンスを肯定的に受けとめている傾向が示された。今後の課題として、効果的なカンファレンスにするため看護スタッフが感じる乖離を縮められるような基盤作りの必要性が示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 執筆者：池内彰子 栗原加代 山岸千恵 坂江千寿子</p>
<p>3. 早期看護体験実習の体験を通した学びと効果 —学生の記述レポートから、困ったこと、成長したこと、努力したこと— に焦点をあてて— (査読付)</p>	<p>共著</p>	<p>平成23年2月発行</p>	<p>茨城キリスト教大学看護学部紀要第2巻第1号 pp. 55-62</p>	<p>2009年度の早期看護体験実習での学生の学びについて、学生が実習終了後に提出したレポートの内容を質的に分析した。その結果、学生は実習中、知識技術・コミュニケーション能力不足などの困難を感じながら、自己成長・変化を体験していた。また、学生の看護師を目指す気持ちの高まりや、看護学を学ぶ動機付けとして早期看護体験実習が効果的であったことが示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析担当) 執筆者：渋谷えみ 池内彰子 坂間伊津美 坂江千寿子 松澤明美 栗原加代 津田茂子 藤村真弓 小松美穂子</p>



4. 精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識 (査読付)	共著	平成23年5月25日発行	日本精神科看護学会誌第54巻1号 pp. 116-117	精神看護学実習中に行っている「倫理的課題検討カンファレンス」の看護スタッフの認識と、カンファレンスの臨床への効果を明らかにするために実習病院の看護スタッフを対象に質問紙を用いて調査した。その結果、看護スタッフは概ね肯定的にカンファレンスをとらえていた。しかし、「カンファレンスは臨床に役立っている」との回答は50%以下であった。その理由として、検討課題として提示された内容に心理的葛藤や対立軸を含まない事項が多いこと、現実的に改善可能ではない構造や設備の問題が挙げられ、現場の状況との乖離があることが要因と考えられた。看護スタッフはカンファレンス自体は必要と認めても、ケアの不適切な部分の指摘をとらえ、それに至るやむを得ない事情などを自分の言葉で説明し、学生の理解を得られなかったという不全感を残し兼ねず、方法論での改善の必要性が示唆された。 (共同研究にて本人部分抽出不可能 データ収集・分析・論文執筆担当) 執筆者：池内彰子 栗原加代 坂江千寿子 松永晃 小林邦子 川崎弘道 二瓶弘子 鈴木豊
5. 遺族が新たなアイデンティティを獲得するためのプロセス	共著	平成24年1月31日発行	第42回日本看護学会論文集(老年看護) 2012年 pp. 128-130	死別を体験をし、悲嘆過程を自ら語る遺族はどのような要因で新たなアイデンティティを獲得したのかを明らかにするために3名の遺族に半構造インタビューを行い、質的な分析を行った。その結果、医療者とのコミュニケーション不足、故人との関わりの不足は新しいアイデンティティ獲得の妨げとなる。感情表出の場、自分が尽くしたという達成感や悲嘆過程の回復を促進し、新たなアイデンティティ獲得につながることを示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可能 データ収集・分析担当) 村井茉奈香 栗原加代 池内彰子
6. 精神科病棟保護室患者の退出時期に関する実証的研究ーナースによる開放判断用観察シートを試用してー (査読付)	共著	平成24年2月発行	茨城キリスト教大学看護学部紀要第3巻第1号 pp. 21-28	保護室入室中の患者の回復状態を観察するための判断基準を用いて、2種類の観察シートを作成し、看護師が保護室患者の状態を把握することは、観察開放や退室の可能性の判断根拠となり入室期間の短縮化につながるか否かを明らかにすることを目的とし、保護室の看護師が保護室入室患者ごとに継続的に観察した結果を点数化し、看護師の退室判断の基準を探った。また、観察シート使用前後で退室までの期間が短縮化されたか否かについて比較検討した。その結果、患者の退室の判断がしやすく保護室入室期間が短縮されていたことが明らかになった (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 執筆者：池内彰子 坂江千寿子 山田剛志 中村吉臣 前田和子 砂川昌幸

7. 精神科病棟保護室患者の開放判断観察用シート使用の試み（査読付）	共著	平成24年5月31日	日本精神科看護学会誌第55巻1号 pp. 32-33	保護室入室中の患者の回復状態を観察するための判断基準を用いて、2種類の観察シートを作成し、看護師が保護室患者の状態を把握することは、観察開放や退室の可能性の判断根拠となり入室期間の短縮化につながるか否かを明らかにすることを目的とし、保護室の看護師が保護室入室患者ごとに継続的に観察した結果を点数化し、看護師の退室判断の基準を探った。また、観察シート使用前で退室までの期間が短縮化されたか否かについて比較検討した。その結果、患者の退室の判断がしやすく保護室入室期間が短縮されていたことが明らかになった （共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当） 執筆者：池内彰子 坂江千寿子 山田剛志 中村吉臣 前田和子 砂川昌幸
8. ケア提供者が重度認知症高齢者の感情をとらえる視点とその解釈（査読付）	共著	平成24年10月発行	日本認知症ケア学会誌第11巻第3号 pp. 709-714	コミュニケーション能力が低下し自分の感情やニードを適切にケア提供者に伝えることが難しい重度認知症高齢者の快・不快感情をケア提供者がどのような視点から把握し、どのようなアセスメントのもとで援助につなげているのかを明らかにすることを目的に、介護老人保健施設と特別養護老人ホームに勤務する看護師6名、介護福祉士5名にそれぞれフォーカスグループインタビューを行い、さらにどのように重度認知症高齢者と相互作用をしながらケア提供の必要性を判断しているのかを参加観察し分析した結果、ケア提供者が重度認知症高齢者の感情を把握する視点として、【いつもの状態からの変化】など4カテゴリーを抽出した。さらに、ケア提供者が重度認知症高齢者に実際にケアを行っている場面に参加観察し、どのように重度認知症高齢者と相互作用をしながらケア提供の必要性を判断しているのか分析した結果、【状況が変化する予測】などの4カテゴリーを抽出した。ケア提供者は重度認知症高齢者の「いつもの状態」からの逸脱の状況により、快・不快の感情を把握していたことが示唆された （共同研究にて本人部分抽出不可能 データ収集・分析・論文執筆担当） 執筆者：池内彰子 堀内ふき
9. 東日本大震災により看護学生が受けた心理的影響—被災の経験による心理的影響の違いに焦点をあてて— （査読付き）	共著	平成25年2月発行	茨城キリスト教大学看護学部紀要第4巻第1号 pp. 79-87	東日本大震災(以下大震災)時にA大学看護学部の学生が経験した被災の状況と、被災の経験による学生の心理的影響を明らかにし、必要なメンタルヘルスサポートについての示唆を得ることを目的に、大震災から7ヶ月経過後に改訂版出来事インパクト尺度を用いた自記式質問紙調査を行った。その結果、約1割の学生が外傷後ストレス障害(以下PTSD)のハイリスクであることが明らかになった。また、家族の負傷、火災、建物倒壊の目撃経験など、深刻な被災の経験をした学生ほどPTSDハイリスク率が高い傾向が示された。これらの結果より、今後は家族の負傷、火災、建物倒壊の目撃経験など、大震災時に特異的な経験をした学生に注目し、個別的なサポートを行いPTSDの発症・遷延化の予防に取り組む必要性について示唆された （共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当） 執筆者：池内彰子 栗原加代 坂江千寿子

10. 遺族の医療場面における心残りの要因（査読付）	共著	平成25年3月発行	均衡生活学第9巻第1号平成25年3月発行 pp. 23-27	入院後家族を亡くした遺族に焦点を当て、医療場面での心残りについて分析し、遺族が満足感をもてるような看護師の関わりについて明らかにすることを目的に、3名の遺族に半構造インタビューを行い、質的な分析を行った。その結果、遺族の医療場面での心残りとして、医師が患者や家族と関わろうとする姿勢が感じられないことからくる不全感、病状変化と処置の説明不足からくる不安、患者への配慮不足からくる罪悪感などの気持ちを抱いていることが示唆された。 (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・担当) 執筆者: 大杉美沙恵 栗原加代 池内彰子
11. 地域で暮らす統合失調症療養者の東日本大震災における経験（査読付き）	共著	平成27年3月発行	茨城キリスト教大学看護学部紀要第6巻第1号 pp. 3-11	東日本大震災（以下、大震災）の被災地で生活している統合失調症療養者の大震災時の経験について明らかにし、災害時の必要な支援について示唆を得ることを目的に、大震災から9か月後に、被災地のデイケアに通所している統合失調症療養者8名に対し、被災の経験について半構成的面接法を行い、質的帰納的に分析した。 その結果、17のサブカテゴリーが抽出され、「非常時のストレス状況下でとられた対処行動」など6カテゴリーに集約された。このことから、心身の不調等の医療ニーズへの対応、ストレス耐性の低い避難者にとって、適応しやすい避難所の確保、相談しやすいネットワークづくりの必要性、普段の生活からの服薬アドヒアランス維持の重要性について示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 執筆者: 池内彰子 栗原加代 宇留野由紀子
12. 精神科看護師の患者の身体症状の出現・変化に気づく能力に関する文献的研究（査読付き）	共著	平成28年3月発行	茨城キリスト教大学看護学部紀要第7巻第1号 pp. 45-53	文献検討を通して「精神科看護師の患者の身体症状の出現・変化に気づく能力」について考察する事を目的に、精神科看護師の患者の身体症状の出現・変化に気づく能力は、大きくは看護師の臨床判断能力の一部であるとしてとらえ、精神科看護師の臨床判断に関する11文献の内容の精読を通し内容の抽出を行った。その結果、【いつものイメージからの逸脱を把握】【気にかかることの意識化】【心身のわずかな手がかり・兆しの感知】【多角的で柔軟な分析力】【判断を確かめるための相互作用】【自らの経験知の活用】【患者との状況の共有】の7カテゴリーが導き出された。そして、「精神科看護師の患者の身体症状の出現・変化に気づく能力」は、察知した患者の変化を多面的に確認しながら、確実な判断につなげるための一連のプロセスを遂行する能力であることが示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 執筆者: 池内彰子 上野恭子

<p>13. 精神科看護師の批判的思考態度を促進するためのリフレクションを用いた教育プログラムの開発—統合失調症患者の身体症状の判断に焦点をあてて— (博士論文)</p>	<p>単著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>順天堂大学大学院医療看護学研究科看護学専攻博士後期課程</p>	<p>精神科看護師が、統合失調症患者の身体症状を批判的思考に基づき正確に判断するために、批判的思考態度の向上をめざした教育的な介入を試み、その効果の検証を目的とした。最初に予備研究として、精神科看護師の批判的思考態度の関連因子を自記式質問紙調査で明らかにし、教育プログラムで焦点を当てる因子を明確化した。次に、それを基に精神科看護師の批判的思考態度を促進するための教育プログラム案を作成した。教育プログラムは統合失調症患者の身体症状を判断した場面をリフレクションする内容とした。介入は準実験研究（1群事前事後テスト）デザインとし、身体科臨床経験のない精神科臨床経験が5年未満の看護師23名を分析対象とした。評価は、介入前・介入直後と1ヶ月後に、批判的思考態度尺度・一般性自己効力感尺度等を測定した。介入1か月後に教育プログラムの参加者10名を対象に、統合失調症患者の身体症状の判断の内容を質的に把握するための半構造化インタビューを実施した。その結果、介入直後、介入1ヶ月後ともに、批判的思考態度の内省力の促進が示された。また物事に対する能動的な変化がみられた。このことは、半構造化インタビューの結果、コアカテゴリー《リフレクションによる変化》が形成されたことで裏づけられた。今後の課題として、教育プログラムによる継続的な介入の必要性が示唆された。 (総頁数77)</p>
<p>14. 精神科看護師の批判的思考態度と臨床経験の関連 (原著) (査読付き)</p>	<p>単著</p>	<p>平成31年3月</p>	<p>常磐看護学研究雑誌第1巻pp. 17-26</p>	<p>精神科看護師の批判的思考態度と臨床経験の関係性を明確にすることを目的に、全国の中小規模の単科精神科病院28施設の看護師を対象に自記式質問紙調査を行った。調査票の配布数は961部、回収数は483部で有効回答数は426部であった。分析の結果、精神科臨床経験10年を目処に、批判的思考態度下位尺度が養われることが示唆され、さらに、一般科臨床経験のある対象者は、批判的思考態度が有意に高く示された。これらことから、精神科看護師が物事を懐疑的、内省的にとらえるための批判的思考態度を向上させる学習を支援する必要性について示唆された 池内彰子</p>
<p>15. 茨城県における精神疾患を有する在宅療養者への訪問看護の現状と訪問看護事業所管理者の困難感 (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年3月</p>	<p>常磐看護学研究雑誌第2巻pp. 41-50</p>	<p>茨城県における精神疾患療養者への訪問看護の現状と、管理者の困難感を明確にすることを目的とし、茨城県内で精神疾患療養者への訪問看護に対応している訪問看護事業所101施設の管理者を対象に質問紙調査を実施した。その結果、訪問看護の実情として、訪問看護師の71.4%が精神科病棟での臨床経験を有していなかった。また、利用者である精神疾患療養者の多くが中高年者で、身体疾患を併発し多方面からの医療的管理を継続的に必要としていた。さらに、管理者の抱く困難感は7カテゴリーに集約された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 池内彰子 福田大祐 長谷川陽子</p>

<p>16. 慢性期統合失調症者の実行機能障害の特徴と関連要因 (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年3月</p>	<p>常磐看護学研究雑誌第2巻pp. 3-10</p>	<p>慢性期統合失調症者の実行機能障害の特徴と関連要因について明らかにすることを研究目的とした。外来へ通院中の慢性期統合失調症者8名を対象に実行機能評価 Behavioural Assessment of the Dysexecutive Syndrome (BADS) を用い、基本情報との関連性について分析を行った。その結果、慢性期統合失調症者の実行機能障害の特徴として病状が経過する中で進行する可能性が考えられ、再発や再入院、陰性症状、抗精神病薬の種類・量との関連性が示唆された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 福田大祐 池内彰子 森千鶴</p>
<p>17. Characteristics of Executive Dysfunction in Outpatients with Chronic Schizophrenia in Daily Behavior: A Preliminary Report (和訳) 慢性統合失調症外来患者の日常生活行動における実行機能障害の特徴：予備報告 (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>August, 2020</p>	<p>International Medical Journal, Vo 1 27, No. 4, pp. 382-385</p>	<p>(和訳) 慢性統合失調症の実行機能障害の特徴を調査することを目的に、慢性統合失調症の外来患者8人を対象に神経心理学的テスト 遂行機能障害症候群 (BADS) の行動評価調査を実施した。その結果、慢性統合失調症の外来患者の平均BADSスコアは、「障害のある」カテゴリに分類され、Modified Six Elements Test、Zoo Map Test、およびKey SearchTestのスコアは間低値であった。さらにルール・シフトカードテスト、キー検索テスト、および遂行機能障害の自己評価スコアは、BADSと中程度の相関関係があり、慢性統合失調症の外来患者は、「計画」能力と「認知的柔軟性」に障害があることが示された (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) Daisuke Fukuta, Shoko Ikeuchi, Chizuru Mori</p>
<p>18. 精神科看護師の批判的思考態度を促進するためのリフレクションを用いた教育プログラムの効果—統合失調症患者の身体症状の判断に焦点をあてて— (原著) (査読付き)</p>	<p>共著</p>	<p>令和2年12月1日</p>	<p>日本精神保健看護学会誌 第29巻第2号 pp. 9-18</p>	<p>精神科看護師が、統合失調症患者の身体症状を批判的思考に基づき正確に判断するために、批判的思考態度の向上をめざした教育的な介入を試み、その効果の検証を目的とした。教育プログラムは統合失調症患者の身体症状を判断した場面をリフレクションする内容とした。介入は準実験研究 (1群事前事後テスト) デザインとし、身体科臨床経験のない精神科臨床経験が5年未満の看護師23名対象とした。評価は、介入前・介入直後と1ヶ月後に、批判的思考態度尺度・一般性自己効力感尺度等を測定した。介入1か月後に教育プログラムの参加者10名を対象に、統合失調症患者の身体症状の判断の内容を質的に把握するための半構造化インタビューを実施した。その結果、介入直後、介入1ヶ月後ともに、批判的思考態度の内省力の促進が示された。また物事に対する能動的な変化がみられた。このことは、半構造化インタビューの結果、コアカテゴリー 《リフレクションによる変化》が形成されたことで裏づけられた (共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析・論文執筆担当) 池内彰子、上野燕子</p>
<p>19. Cognitive Rehabilitation for Improving the Executive Functions of Outpatients with Chronic Schizophrenia in Psychiatric Day Hospital: A Pre-Post-Intervention Study</p>	<p>共著</p>	<p>2023年5月</p>	<p>International Medical Journal Vol. 30, No. 3 pp. 1 -5</p>	<p>慢性期統合失調症者の実行機能を改善するための介入プログラムの効果を検討した。介入プログラムの結果、計画遂行能力、認知的柔軟性、自己効力感が有意上昇し、慢性統合失調症療養者の実行機能障害の改善と自己洞察能力、精神的健康の回復に貢献することが明らかになった。(共同研究にて本人部分抽出不可 データ収集・分析担当) 共著者 : Fukuta D, Ikeuchi S, Mori C</p>

<p>「総説等」 1 看護過程を理解しよう</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年9月1日</p>	<p>准看護師資格試験9月臨時増刊号 医学芸術社 pp. 38-49</p>	<p>看護の初学者向けに看護過程の実際について、基本的な思考過程から実際の事例展開までをまとめた 担当部分：第3章「看護理論と看護過程」 第4章「看護過程におけるアセスメントとは？」 執筆者：柴田京子 池内彰子</p>
<p>2. 認知症を正しくアセスメントする</p>	<p>共著</p>	<p>平成21年6月15日発行</p>	<p>臨床看護6月号へるす出版 pp. 1013 ~1019</p>	<p>認知症者の身体合併症のアセスメントについて、観察の視点、フィジカルイグザミネーション技術の重要性について述べた 担当部分：P1015~1017 執筆者：堀内ふき 池内彰子</p>
<p>3. 精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識—カンファレンス参加経験の有無に焦点をあてて—</p>	<p>—</p>	<p>平成22年10月30日</p>	<p>平成22年度日本精神看護協会茨城県支部看護研究発表論文集 pp. 26~27 (水戸市)</p>	<p>倫理的課題におけるカンファレンスでの検討結果を提示される看護スタッフは、どのように本カンファレンスをとらえているかを明らかにすることを目的に実習病院の看護スタッフを対象に無記名の自記式質問紙調査とを行った。その結果、カンファレンスへの参加経験の有無に関わらず、70%の看護スタッフはカンファレンスに対し継続したほうが良いと回答し、概ね肯定的な受け止め方をしていることが示唆された。ただし、役立っているとの回答は50%以下であり、検討課題として提示された内容に心理的葛藤や対立軸を含まない事項が多いこと、現実的に改善可能ではない構造や設備の問題が挙げられ、現場の状況との乖離があることも示唆された。今後は、看護スタッフは、カンファレンスで話し合われる内容と現状との乖離を感じていることも明らかになった。今後は看護スタッフにカンファレンスへの直接的な参加を促し、看護スタッフが感じる距離を縮められるような基盤作りが課題である 口演にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原 加代 坂江千寿子 松永晃 小林邦子 川崎弘道 二瓶弘子 鈴木豊</p>
<p>4. 精神科病棟保護室患者の開放判断観察用シート使用の試み</p>	<p>—</p>	<p>平成24年6月1日</p>	<p>平成24年度日本精神看護協会看護研究発表会全国大会 研究発表論文集pp. 2~3 (神戸市)</p>	<p>保護室入室中の患者の回復状態を観察するための判断基準を用いて、2種類の観察シートを作成し、看護師が保護室患者の状態を把握することは、観察開放や退室の可能性の判断根拠となり入室期間の短縮化につながるか否かを明らかにすることを目的とし、保護室の看護師が保護室入室患者ごとに継続的に観察した結果を点数化し、看護師の退室判断の基準を探った。また、観察シート使用前後で退室までの期間が短縮化されたか否かについて比較検討した。看護師が観察シートを使用して回復兆候の観察を行った結果、患者の退室の判断がしやすく保護室入室期間が短縮されていた。さらに、退室の判断基準として、観察シート ①「保護室入室理由からみた観察開放開始の予測」の合計点が1点未満、観察シート ②「保護室入室患者の回復兆候」は2点から3点が目安となり、観察シート使用可能な対象者として、認知症の患者は適していないことが示唆された 口演にて発表 共同発表者：池内彰子 坂江千寿子 山田剛志 中村吉臣 前田和子 砂川昌幸</p>

<p>5. 精神科病棟における認知症患者の看護に関する研究の動向(査読付き)</p>	<p>単著</p>	<p>令和3年3月15日</p>	<p>常磐看護学研究雑誌第3巻 pp. 1-10</p>	<p>現在の精神科病棟における認知症患者の効果的な看護を考える上での示唆を得ることを目的に、文献検索の二次資料データベースを医学中央雑誌Web版、およびCiNiiArticles、MEDLINE Complete、CINAHL Plusとして、最近10年間の精神科病棟における認知症患者の看護に関する国内外の研究論文19文献を抽出、精読し、認知症患者への効果的な看護につながる知見について検討した。その結果、精神科病棟における認知症の患者への看護を考える上では、BPSD、および患者の身体的な問題について重要視し、精神科看護師に対するBPSDに関連した教育の必要性が求められること。また、従来の精神科看護の枠組みにとらわれず、他の精神疾患の患者への実践と、認知症の患者への実践における同一点、相違点を丁寧に検討し、援助方法を構築していく必要性について示唆された 執筆者：池内彰子</p>
<p>「学会発表等」 1. ケア提供者による重度認知症高齢者の感情把握からケア提供までのアセスメント過程の分析</p>	<p>—</p>	<p>平成21年9月27日</p>	<p>日本老年看護学会第14回学術集会抄録集 p. 132 (札幌市)</p>	<p>コミュニケーション能力が低下し自分の感情やニーズを適切にケア提供者に伝えることが難しい重度認知症高齢者の快・不快感をケア提供者がどのような視点から把握し、アセスメントし援助につなげているのかを明らかにすることを目的に、介護老人保健施設と特別養護老人ホームに勤務する看護師6名、介護福祉士5名にそれぞれフォーカスグループインタビューを行い、さらに重度認知症高齢者との相互作用を通してどのようにケア提供の必要性を判断しているのかを参加観察し分析した結果、ケア提供者が重度認知症高齢者の感情を把握する視点として【いつもの状態からの変化】などの4カテゴリーを抽出した。さらに、ケア提供者が重度認知症高齢者に実際にケアを行っている場面を参加観察し、どのように重度認知症高齢者と相互作用をしながらケア提供の必要性を判断しているのか分析した結果、【状況が変化する予測】などの4カテゴリーを抽出した。 口演にて発表 共同発表者：池内彰子 堀内ふき</p>
<p>2. 精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識</p>	<p>—</p>	<p>平成22年8月22日</p>	<p>日本看護研究学会第34回学術集会抄録集 p. 385 (岡山市)</p>	<p>臨床側と連携した効果的な「倫理的課題検討カンファレンス」のあり方についての示唆を得るために、カンファレンスに対する看護スタッフの認識を明らかにすることを目的とし、実習病院の看護スタッフを対象に無記名の自記式質問紙調査を行った。その結果、看護スタッフはカンファレンスに対し肯定的な認識を持っていることが示唆された。カンファレンスに参加した看護スタッフはさらにその傾向が高くみられた。その理由として、実際にカンファレンスに参加し思いや意見を直接表現し学生と相互作用し合えることは、看護スタッフにとってもアサーションを発揮した自己表現の場となり肯定感につながったと考える。また、看護スタッフがカンファレンスは臨床に役立ち今後も継続の必要があると認識しているという結果から、カンファレンスが患者中心の看護のために貢献できる可能性があると考えた 示説にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原加代 山岸千恵 坂江千寿子</p>

<p>3. 精神看護学実習の倫理的課題の検討に関する看護スタッフの認識－カンファレンス参加経験の有無に焦点をあてて－</p>	一	平成23年5月31日	<p>平成23年度日本精神看護協会看護研究発表会 全国大会 研究発表論文集 p. 116 (福岡市)</p>	<p>倫理的課題におけるカンファレンスでの検討結果を提示される看護スタッフは、どのように本カンファレンスをとらえているかを明らかにすることを目的に実習病院の看護スタッフを対象に無記名の自記式質問紙調査とを行った。その結果、カンファレンスへの参加経験の有無に関わらず、70%の看護スタッフはカンファレンスに対し継続したほうが良いと回答し、概ね肯定的な受けとめ方をしていることが示唆された。ただし、役立っているとの回答は50%以下であり、検討課題として提示された内容に心理的葛藤や対立軸を含まない事項が多いこと、現実的に改善可能ではない構造や設備の問題が挙げられ、現場の状況との乖離があることも示唆された。今後は、看護スタッフは、カンファレンスで話し合われる内容と現状との乖離を感じていることも明らかになった。今後は看護スタッフにカンファレンスへの直接的な参加を促し、看護スタッフを感じる距離を縮められるような基盤作りが課題である。 口演にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原 加代 坂江千寿子 松永晃 小林邦子 川崎弘道 二瓶弘子 鈴木豊</p>
<p>4. 遺族が新たなアイデンティティを獲得するために必要な要因</p>	一	平成23年7月26日	<p>第42回日本看護学会抄録集老年看護 (さいたま市) P172</p>	<p>入院後家族を亡くした遺族に焦点を当て、医療場面での心残りについて分析し、遺族が満足感をもてるような看護師の関わりについて明らかにすることを目的に、3名の遺族に半構造インタビューを行い、質的な分析を行った。その結果、遺族の医療場面での心残りとして、医師が患者や家族と関わろうとする姿勢が感じられないことからくる不全感、病状変化と処置の説明不足からくる不安、患者への配慮不足からくる罪悪感などの気持ちを抱いていることが示唆された。 示説にて発表 共同発表者：大杉美沙恵 栗原加代 池内彰子</p>
<p>5. 遺族が新たなアイデンティティを獲得するためのプロセス</p>	一	平成23年7月26日	<p>第42回日本看護学会抄録集老年看護 p. 173 (さいたま市)</p>	<p>死別を体験をし、悲嘆過程を自ら語る遺族はどのような要因で新たなアイデンティティを獲得したのかを明らかにするために3名の遺族に半構造インタビューを行い、質的な分析を行った。その結果、医療者とのコミュニケーション不足、故人との関わりの不足は新しいアイデンティティ獲得の妨げとなる。感情表出の場、自分が尽くしたという達成感は悲嘆過程の回復を促進し、新たなアイデンティティ獲得につながることを示唆された 示説にて発表 共同発表者：村井茉奈香 栗原加代 池内彰子</p>



<p>6. ケア提供者が重度認知症高齢者の感情をとらえる視点と解釈の分析</p>	<p>一</p>	<p>平成23年9月25日</p>	<p>第12回日本認知症ケア学会学術集会抄録集 p. 466 (横浜市)</p>	<p>ケア提供者が重度認知症高齢者の感情をとらえる視点と、それをどのように解釈しケアにつなげているのかを明らかにすることを目的とした。第一段階としてケア提供者にフォーカスグループインタビューを行い、どのような視点で重度認知症高齢者の感情をとらえているのかを、第二段階として実際のケア場面での参加観察とそれに基づくインタビューにより、とらえた感情をどのように解釈しているのかを質的に抽出した。その結果、感情をとらえる視点について〈いつもの状態からの変化〉、〈いつもと違う日常生活行動〉、〈他者への関わりの様子〉が抽出された。また、その解釈について{状況が変化する予測}、{快感情を尊重し持続させる必要性}、{体調確認の必要性}、{即時的なケア提供の必要性}が抽出された。これらの視点およびその解釈は、重度認知症高齢者の状態をアセスメントする際の判断の指標として有効であることが示唆された 口演にて発表 共同発表者：池内彰子 堀内ふき</p>
<p>7. 被災地に在住する看護系大学生が東日本大震災により受けた心理的影響</p>	<p>一</p>	<p>平成24年12月1日</p>	<p>第32回日本看護科学学会学術集会講演集 p. 567 (東京都)</p>	<p>東日本大震災(以下大震災)時にA大学看護学部の学生が経験した被災の状況と、被災の経験による学生の心理的影響を明らかにし、必要なメンタルヘルスサポートについての示唆を得ることを目的に、大震災から7ヶ月経過後に改訂版出来事インパクト尺度を用いた自記式質問紙調査を行った。その結果、約1割の学生が外傷後ストレス障害(以下PTSD)のハイリスクであることが明らかになった。また、家族の負傷、火災、建物倒壊の目撃経験など、深刻な被災の経験をした学生ほどPTSDハイリスク率が高い傾向が示された。これらの結果より、今後は家族の負傷、火災、建物倒壊の目撃経験など、大震災時に特異的な経験をした学生に注目し、個別的なサポートを行いPTSDの発症・遷延化の予防に取り組む必要性について示唆された 示説にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原加代 坂江千寿子</p>
<p>8. 被災地で暮らす統合失調症を有する人の東日本大震災による影響</p>	<p>一</p>	<p>平成25年12月7日</p>	<p>日本看護科学学会学術集会講演集 p. 644 (大阪府)</p>	<p>東日本大震災(以下大震災)の被災地在住の統合失調の方が、大震災により受けた影響を明らかにするために、被災地のデイケアに通所する8名を対象に半構造化インタビューを行った。その結果【ストレス状況下でとられた対処行動】【身体の変化】【生活上の困難】【サポート(助け)になったこと】【弊害の要因になったこと】【薬へのコンプライアンス】のカテゴリーが抽出された。これらのことから統合失調症者がもつストレスへの脆弱性が大震災の経験をストレスフルにし、困難感の増大につながっていた。また、服薬のコンプライアンスが発揮され、そのことが本人たちの支えとなっていたことが示唆された 示説にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原加代 坂江千寿子</p>

9. 看護学生におけるアディクションの傾向と自己肯定感との関連	一	平成26年11月29日	第34回日本看護科学学会学術集会講演集 P. 638 (名古屋市)	<p>A 大学看護学部学生のアディクションの傾向を明らかにし、精神的健康の指標である自己肯定感との関連について検討する事を目的</p> <p>学生369名を対象に、無記名の自記式質問紙調査を実施した。その結果、アディクション傾向の自覚のある学生は全体の3割であった。それら対象者の傾向として、他者に情緒的なサポートを強く求める傾向と、具体的問題解決を求める道具的対人依存の有意的傾向が示唆された。また、依存する事柄としては、携帯電話、ゲームなど簡便な方法で他者と繋がる道具が選択されていた。このことは、ストレスへの脆弱性を持つ学生が、精神的安定を得るために講じる適応の手段として、他者との直接対峙だけではなく携帯電話などの道具を通し、常に情緒的かつ具体的な繋がりを求めていることが示された。</p> <p>示説にて発表 共同発表者：池内彰子 栗原加代 宇留野由紀子</p>
10. 新生児訪問における助産師のかかわりを振り返って—E P D E・赤ちゃんへの気持ちの質問票から褥婦の思い—(査読付き)	一	平成27年6月28日	日本精神保健看護学会第25回学術集会抄録集 P. 211 (つくば市)	<p>E P S Dと赤ちゃんの気持ち問診票を用いて褥婦40名の精神状態について把握し、新生児訪問を行う助産師の支援の在り方について考察した。その結果、助産師による新生児訪問により、褥婦のE P S D値の低下が認められ、助産師による新生児訪問の必要性と、地域の連携の在り方についての示唆を得た。</p> <p>示説にて発表 共同発表者：宇留野由紀子 栗原加代 池内彰子</p>
11. 救急外来および救命病棟の看護師が繰り返し自殺を行う患者を救命する時に抱く感情と葛藤—感情労働とストレスに焦点をあてて—	一	平成27年6月28日	日本精神保健看護学会第25回学術集会抄録集 p. 209 (つくば市)	<p>自殺を繰り返す患者を看護する救急外来、救命病棟の看護師の心理的な葛藤、ストレスなどを明らかにし、看護師に必要な支援を探索することを目的に、救急外来、救命病棟の看護師488名にアンケート調査を実施した。その結果、救急外来、救命病棟の看護師は、自殺企図の患者に対して陰性感情を抱いていること、感情労働として高い値を示したこと、葛藤の有無によりストレスに差異がみられたことが明らかになり、救急外来、救命病棟の看護師心理的な支援の必要性について示唆を得た</p> <p>示説にて発表 共同発表者：長津貴子 栗原加代 池内彰子 宇留野由紀子</p>
12. 救急外来および救命病棟の看護師が繰り返し自殺を行う患者を救命する時に抱く困難さ	一	平成27年12月6日	第35回日本看護科学学会学術集会講演集 P. 668 (広島市)	<p>自殺を繰り返す患者を看護する救急外来、救命病棟の看護師の困難感を明らかにし、看護師に必要な支援を探索することを目的に、救急外来、救命病棟の看護師488名にアンケート調査を実施した。アンケートの中の困難さについての自由記述内容を質的に分析し、その結果、困難感の内容として【精神科的介入方法がわからない】【精神科スタッフ不在の不全感と医師との連携不足】【自殺企図者の心理とケア間に生じる相反する現状】【看護師に生じる葛藤と無力感】のカテゴリーを得た。このことから自殺を繰り返す患者に看護師が困難感を抱きながら対応している現状と、看護師への支援の必要性について示唆された</p> <p>示説にて発表 共同発表者：長津貴子 栗原加代 池内彰子 宇留野由紀子</p>

13 . A Literature Review on Abilities Necessary for Psychiatric Nurses to Perceive Changes in Patients' Physical Symptoms (査読付き)	一	平成27年3月14日	19th EAFONS (Chiba, Japan)	<p>(和訳) 文献検討により患者の身体症状の変化の「気づき」を促す精神科看護師の能力を列挙することを目的とした。データベースを医中誌WebVer. 5とし、期間は2004年から2015年とした。検索ワードを「気づき」「精神科看護師」「臨床判断」「クリニカルジャッジメント」「精神疾患」「身体合併症」とした。該当した87件のうち重複するもの、会議録、事例報告を除外し、最終的に査読付き研究論文17文献を分析対象とした。そして、精神科看護師の観察・判断に関する部分を各論文の結果・考察から抜き出し、精神科看護師が患者の症状に気づくための能力として、【観察力】【心身のわずかな手がかり・兆しを感知する】【自らの経験知の活用】【多角的で柔軟な分析力】【気にかかることを意識化する】【状況を患者と共有する】【判断を確かめるための相互作用】が得られた。患者の身体症状の変化の早期発見につながる精神科看護師の気づきは、「気にかける」「察知する」「分析する」などの知的な能力、さらに「共有する」「相互作用する」という行動のレベルまで多彩な能力が必要であることが示唆された。</p> <p>示説にて発表 共同発表者：Shoko Ikeuchi Kyoko Ueno</p>
14. 客観的スキル試験 (OSCE) における教員による評価と学生の自己評価の分析と課題	一	平成28年12月10日	第36回日本看護科学学会学術集会講演集 p. 61 (東京都)	<p>客観的臨床能力試験 (Objective Structured Clinical Examination; 以下、OSCE) における教員の評価と、OSCE実施後の学生の自己評価について検討し、今後の学生の看護実践能力育成に向けた効果的な学習方法につながるための課題を明らかにすることを目的とした。OSCEを受験した4年次生 71名に関する教員による評価表と、学生の自己評価表の項目 (全20項目) について分析した。各評価表を単純集計し、評価項目ごとに平均値を算出し、教員の評価と学生の自己評価の平均値をt検定 (有意水準5%) で比較した。その結果、肺気腫課題の課題と進行胃がんの課題のとも学生の自己評価の方が高く、観察に関する評価項目や患者への説明に関する評価項目有意差が示され、教員の求める到達レベルと、学生のイメージしている到達レベルとで差異があることが明らかになった。求められるレベルにおける患者への説明や観察の方法・内容を、OSCEに至るまでの教育の中で学生に具体的に明示していく必要性について示唆された</p> <p>示説にて発表 共同発表者：池内彰子 小幡明香 坂間伊津美 原島利恵 滝沢真智子 小池美香 山本真千子</p>

<p>15. 精神科看護師の臨床経験年数からみた批判的思考態度の分析</p>	<p>一</p>	<p>平成29年12月16日</p>	<p>第37回日本看護科学学会学術集会講演集(宮城県) P64</p>	<p>精神科看護師の臨床経験は批判的思考態度とどのように関連しているのかを明らかにすることを目的とした。全国の精神科を標榜する病床数が100～300床の中小規模の単科精神科病院28施設。設の精神科病院で、入院患者の日常ケアを行っている看護師・准看護師を対象に自記式質問紙調査を行った。調査票は、基本属性と批判的思考態度尺度(常盤, 2010) 15項目から作成した。得られたデータは単純集計し、精神科臨床経験、身体科臨床経験と批判的思考態度との関連を検討した。調査票の有効回答率は46.50%であった。臨床経験と批判的思考態度尺度得点との関連は、対象者の精神科臨床経験を0ヶ月以上36ヶ月未満、36ヶ月以上60ヶ月未満、60ヶ月以上120ヶ月未満、120ヶ月以上の4群に分け、各群の批判的思考態度尺度の得点を比較した。その結果この4群間の批判的思考態度尺度得点には有意差はみられなかった(<math>p=0.759</math>)。しかし、身体科臨床経験の有無と批判的思考態度尺度得点には有意な差(<math>p=0.034</math>)が認められ、身体科での臨床経験は精神科看護師の批判的思考態度を促進することが示唆された。また精神科臨床経験と批判的思考態度は有意な関連は認められなかった。 示説にて発表 共同発表者：池内彰子 上野恭子</p>
<p>16. 精神科看護師の批判的思考態度に対する臨床経験、倫理的感受性、コミュニケーションスキル、自己効力感の影響に関する検討</p>	<p>一</p>	<p>平成30年6月24日</p>	<p>日本精神保健看護学会第28回学術集会・総会(東京)抄録集p. 172</p>	<p>精神科看護師の臨床経験、倫理的感受性、自己効力感、対人コミュニケーションスキルの批判的思考態度への影響について明確にすることを目的とした。無作為に抽出した精神科看護師961名を調査対象者とした。重回帰分析の結果得られたモデルは、倫理的行動、コミュニケーションスキル、一般科臨床経験、一般性自己効力感から構成され、看護師の倫理的行動が最も影響度が大きく、倫理的な感受性が高いと批判的思考態度が促進されることが示唆された。このことから、精神科看護師の批判的思考態度を促進するには、倫理的感受性に働きかける必要があることが示された 示説にて発表 共同発表者：池内彰子 上野恭子</p>
<p>17. Factors influencing critical thinking disposition of psychiatric nurses 和訳：精神科看護師の批判的思考態度に対する影響要因の検討</p>	<p>一</p>	<p>平成30年11月8日</p>	<p>Madridge Conferences 3rd International Nursing Conference(Tokyo) Abstracts Book p. 45</p>	<p>(和訳) 精神科看護師の批判的思考態度に影響する要因について、無作為抽出した全国の単科精神科病院の看護師961名を対象に調査した。その結果、精神科看護師の批判的思考態度には倫理的行動が最も影響度が大きいことが示された。倫理的行動とは、倫理的な感性に惹起され表れる行動のことであり、精神科看護師の倫理的な感受性が高いと批判的思考態度がより促進されることが示唆された。精神科看護師の批判的思考態度を促進するには、倫理的感受性に働きかける必要があることが示された 示説にて発表。発表者 Shoko Ikeuchi</p>



22. A県における在宅精神疾患療養者と家族のケアニーズと訪問看護の課題 第2報 訪問看護師の困難感とその要因	一	令和2年12月12日	日本看護科学学会第40回学術集会（東京都） （オンライン開催）	A県において精神疾患療養者に訪問看護を提供している訪問看護師が抱く困難感を明らかにし、関連要因を検討することを目的とした。A県内の精神疾患療養者への訪問看護を実施している36事業所の訪問看護師97名を対象に、郵送法による無記名自記式質問紙調査を行った。調査内容は、属性、ケア内容、訪問看護の際に感じる困難感の程度、訪問看護師の精神的健康状態（GHQ12）、心身の疲労状態（バーンアウト尺度）であった。調査票は97部配布し回収部数が54部（55.7%）、有効回答数は52部（53.6%）であった。困難感の程度における訪問看護師のGHQ12、およびバーンアウト尺度の関連を検討した結果、GHQ12は、高群（ $p=.010$ ）、中程度群（ $p=.000$ ）ともに有意に高く示された。また、バーンアウト尺度は3群間に有意差は認められなかったが（ $p=.810$ ）、下位尺度の「個人的達成感の後退」に有意差が認められた（ $p=.050$ ）。本調査結果から、精神疾患療養者への訪問看護に困難感を抱いている訪問看護師には精神的健康度の低下が示唆された。また、困難感を抱いている訪問看護師は仕事の成果に対する達成感、効力感が得られにくいことが示された 示発にて発表 共同発表者：池内彰子 長谷川陽子
23. Effects of an intervention program to improve the executive functions of patients with chronic schizophrenia （和訳） 慢性統合失調症患者の実行機能を改善するための介入プログラムの効果	一	令和4年4月21日	25th EAFONS (Taiwan) (Held online)	（和訳） 本研究の目的は、慢性統合失調症の実行機能を改善するための介入プログラムの効果を調べることである。参加者は介入群（ $n=10$ ）と対照群（ $n=8$ ）で、介入群には、タスク固有のルーチンを教えるLezakの概念モデルに基づいた介入プログラム実施した。介入プログラムは6回のセッションで構成された。その結果、介入プログラムは、慢性統合失調症者の計画能力と日常活動の実行機能の改善を促進し、高次機能障害の計画プロセスでは、精神科看護師が自立生活に関連する各患者の問題に焦点を当てる必要について示唆された。 示説にて発表 共同発表者：Fukuta D, Ikeuchi S, Mori C
24. 慢性期統合失調症者の生活と実行機能との関連	一	令和4年6月	日本精神保健看護学会第32回学術集会（オンライン開催）	慢性期統合失調症者の実行機能と生活機能に影響を与える要因を分析し、その関連性を検討した。実行機能障害の日常生活への影響を強く感じている者ほど精神症状を自覚しており、生活機能が低い傾向にあると考えられた。一方、自宅生活者は実行機能のうち時間的長さの推測能力が高く、買い物や食事の準備など自立して生活できていた。 示説にて発表 共同発表者：福田大祐, 池内彰子, 森千鶴
25. デイケア通所中の統合失調症者への看護介入の評価 - 実行機能とプランニング能力に着目して -	一	令和4年8月	日本看護研究学会 第48回学術集会（オンライン開催）	慢性期統合失調症者の実行機能とプランニング能力を高める看護介入プログラムを作成し、その効果を検証した。デイケアへ通所中の慢性期統合失調症者を対象に実行機能を高めるプログラムの効果を検証したところ、全般的な実行機能と下位検査で評価されるプランニング能力の障害が改善され、選択した課題を行う自信が高まっていた。示発にて発表 共同発表者：福田大祐, 池内彰子, 森千鶴

<p>26. Patients' evaluation of a nursing intervention program for improving executive functions in chronic schizophrenia</p>	<p>—</p>	<p>平成35年3月1日</p>	<p>6th East Asia Forum of Nursing Scholars Conference (東京)</p>	<p>(和訳) 慢性期統合失調症者の自己評価による実行機能を改善するための介入プログラムの効果を検討した。介入プログラムの前後において患者は実行機能の改善を自己評価することができていた。一方、計画立案と問題解決能力の向上に関する自己認識が低かった。今後は患者が実行機能の変化を適切に自己評価できるようにする介入プログラムの確立が必要である。示発にて発表 共同発表者：Fukuta D, <u>Ikeuchi S</u>, Mori C</p>
<p>27. Self-care in the daily life of schizophrenic patients living in the community</p>	<p>—</p>	<p>平成35年3月1日</p>	<p>7th East Asia Forum of Nursing Scholars Conference (東京)</p>	<p>(和訳) 地域で暮らす統合失調症療養者は日々の暮らしの中でどのようにセルフケアを行っているのか、その実情を明らかにする目的で1年以上地域生活を継続している統合失調症療養者11名を対象に、半構造化面接を行った。その結果、116コードが抽出され、これらは16サブカテゴリーに集約された。さらに、最終的に【体調を維持するための工夫】【精神の安定を保つための工夫】【自分の生活をより良くするための工夫】【対人関係に支えられているセルフケア】の4カテゴリーが導出された。示発にて発表 発表者：<u>Ikeuchi S</u></p>